

Min'na no basho o tsukuru igi

Original

Min'na no basho o tsukuru igi / Bocco, Andrea - In: Chiku no ie to yane no aru hiroba: Itariahatsu kokyo kenchiku no tsukurikata / Ozasa T., Komatsu H.. - STAMPA. - Tokyo : Kajima Shuppankai, 2018. - ISBN 9784306046702. - pp. 106-109

Availability:

This version is available at: 11583/2808381 since: 2020-04-02T16:50:03Z

Publisher:

Kajima Shuppankai

Published

DOI:

Terms of use:

This article is made available under terms and conditions as specified in the corresponding bibliographic description in the repository

Publisher copyright

(Article begins on next page)

ISBN978-4-306-04670-2

C3052 ¥2500E

定価（本体2,500円＋税）



「地区の家」と「屋根のある広場」
イタリア発・公共建築のつくりかた

小篠隆生
小松尚
共著

「地区の家」と 「屋根のある広場」

イタリア発・公共建築のつくりかた

小篠隆生
小松尚
共著

鹿島出版会

鹿島出版会

はじめに	2
第1部 市民がつくる、みんなの場所「地区の家」	14
第1章 地域の“透明な場所”をつくる カッシーナ・ロッカフランカ	16
第2章 マルチエスニックの拠点として サンサルヴァリオ	42
第3章 経験を活かし新たな展開へ ラボラトリ・ディ・バリエーラ	66
「地区の家」から学ぶ	92
[寄稿] みんなの場所をつくる意義／アンドレア・ポッコ	106
第2部 知と市民をつなぐ「屋根のある広場」	110
第1章 市民の場所、そして文化の拠点をつくる ポローニャ市立サラボルサ図書館	112
第2章 “本が迫ってこない”公共図書館 チニゼットロ・バルサモ市立図書館	140
第3章 知と市民をつなぐ拠点(ハブ)づくり セッティモ・トリネーゼ市立図書館	164
「屋根のある広場」に学ぶ	190
[寄稿] 新しい社会の鏡としての図書館／アントネッラ・アンニョリ	206
おわりに	210
謝辞	215
参考文献	216
プロフィール	218

「地区の家」と 「屋根のある広場」

イタリア発・公共建築のつくりかた

【凡例】

- ・図版名の()内に記した細字は出典を表す。
- ・断りのない写真については共著者の撮影による。
- ・イタリアの地名は、できるだけ現地の発音に近い表記とした。

みんなの場所をつくる意義

アンドレア・ボッコ (訳: 多木陽介)

イタリアの都市は、恐らく公共(みんなの)空間を見るには特筆すべき場所だと言うと¹、他のどの国でもそうだが、日本の読者もこのコンセプトに結びつけてイタリアの旧市街の賑わった広場や人々の行き交う街路のことを想起するだろう。だが、イタリアの都市環境は必ずしも理想的なものではない。都市は旧市街を越えて大きく広がっているし、道路空間の大半は自動車によって占領され、屋外にいるといつも安心出来るというわけではない。さらに、特にこの20年ほどの間にどこでも誰でも使えるようになったインターネットの普及によって、さらに強化された近代化と経験の個人化のプロセスによって、社会性が破壊されてしまった現在において、地域共同体のことを語るのには容易ではない。

都市再生プログラムが各地で新しい段階を迎え、また、図書館等いくつかの公共サービスをよりインフォーマルでダイナミックな形で解釈し直す試み

があったお陰で、イタリアでは21世紀に入ってからよりハイブリッドで革新的で社会的価値の高い公共空間が生まれるようになった。

小篠隆生、小松尚両氏の共著による本書は、地区の家と図書館と言う2つの主題をそれぞれ北イタリア各地で慎重に選び出した3つずつのケーススタディを通して忍耐強く探求し、とても穿った解釈の鍵をいくつか提案してくれているが、それが日本での実践において豊かな成果へと繋がることを期待している。彼らの綿密な資料に基づいた分析を読んで頂ければ必要なことは全て語られているので、ここで私は「地区の家」(あるいはコミュニティ・ハブ)²を成り立たせている最も重要で相互補完的な2つの側面について注意を喚起しておきたい。

場所を与えること

サンサルヴァリオの地区の家が最初

に行ったコミュニケーションキャンペーンにも書かれていたように、地区の家とは、何よりもまず、単に「自分の家にはないが自分の家のように使える空間」のある場所である。例えば、大きなキッチン、大人数で友達と一緒に会食出来る食堂、中庭、テラス……などがそうだ。これは、地区の社会文化的センターであり、自分たちが集ってゲームをしたり、会合をしたり、何かを学ぶための機会を増やすための空間なのである。

地区の家には制度的なところはかけらもなく、訪れた者を気後れさせることなく、温かく迎え入れてくれる。見るからにフレンドリーで、そこで働く人々はみなごく気さくである。居心地が良く、機能は理解しやすく、使い勝手のいい場所で、一日の開館時間も大抵非常に長い。

改修された既存の建物が場所として選ばれているのは、必要上という以上に、意図された選択でもある。地区の家の建物が、そのためにだけに生まれたものではないということには重要な意味がある。ある建物が(地区の家になるために)元々の用途を変えたと言うことは、今後も変化に対応出来るということであり、将来の必要や望みを受け入れてさらに変身を遂げることも出来

るといふことなのだ。

地区の家は、個人主義に陥り、他者への不信感を募らせ、バーチャルな世界に浸る現代社会の傾向に逆行するように、ある目的をもったグループ、あるいは偶然出会った人々同士のグループに場所を提供することで、現実の人と人の間の相互関係が活性化されるのを支援する³。そこで提供される活動内容も空間も多様な可能性を孕んでいるので、年齢的にも文化的にも異なる多くのグループの人々の関心と触れ合う可能性を持っている。つまり、同時に雑多な出来事が多々起こる場所なのである。こうした特性は、本来目指したところ(ターゲットを特化せず、排他的にならないこと)であると同時に、また必要(特に採算を合わせるため)に応じての選択でもあった。

地区の家には多くの空間があるが、ひとつ重要な要素は、屋外でありながら周囲から保護された空間があるということである。(建物に囲まれた)「みんな(公共)の中庭」というメタファーが地区の家の空間概念を上手く説明している

1 B. Rudofsky, *Streets for People*, Garden City, NY: Doubleday & Co, 1969
2 Avanzi et al. (a cura di), *Community hub*, [2016]
3 U. Hannerz, *Exploring the city*, New York: Columbia University Press, 1980

だろう。(これは、著者たちが新タイプの図書館を描写するのに選んだ「屋根のある広場」という概念と完璧に補完し合うものである。)

もうひとつ決定的に重要な空間はカフェテリアである。食を分かち合うことは共生の基本であり、飲食の提供は、(料金が極めて安価に設定してあっても)施設の自立のために欠かせない。コミュニティ・ハブとは、「ビールを注ぎながら社会的に有用なサービスを供給する」場所なのである。さらに、カフェテリアがあれば、食に関する教育活動も出来るし、人と人が集い語り合う場所、という場所自体の特性から、カウンセリング活動を実施するためのベースともなる。

組織体制がフレキシブルなので、市民が地区の家で行われるイベントや活動に参加するのも簡単である。ちらっと偶発的に何かに参加することもありえるし、計画的に真剣な形での参加もありえるのだ。実際、活動プログラムに関しても、地区の家と言うプロジェクトそのものの発展に関しても、参加者にもある程度任せ、運営責任者の輪を広げる形で活動がより自発的に発生することを助長しようとするところがある。

こうして、イタリアにおける数々の地区の家の経験を通して、計画的とは

言えないまでも決して偶然ではない形で、新しい公共(みんなの)空間の概念が形成された⁴。これは、いくつかの新しい図書館がほぼ同時期に見せた発展と同一の方向性を持つものである。

共同体を強化する

プロジェクトの始動者たちによる責任の輪が地区住民に広がり、彼らがそれを自らのものとしてくれること、実はそれが地区の家による地区強化政策の使命の最も重要な部分であり、まさにそれゆえ、時間とともにプロジェクト自体がその姿を変容して行く可能性を持っていなければならない⁵。

そもそも、地区の家とは、住民自身が自分たちの地区のために何かすることの出来る場所である。彼らを取りまくテリトリーを再活性化するために、直接的、明示的な形で、あるいは間接的、暗黙的な形で活動する「生きた実験場(リビング・ラボラトリ)」であり、市民の側から地区のテリトリーのためになる活動やプロジェクトが生まれて来るように支援する義務がある。

その最終的な目標は住民同士の間の人間関係をケアすることであり、その地区において彼らを繋ぐ多様なネットワークを強化することにある。今日の

ような長期化した危機的状況において都市の中で生き延びて行く可能性を増やすには、そこに住む人々の能力を育て、強化しなければならない⁶。都市における代謝過程は、ほぼ完全に外部からの物資とエネルギーの供給に依存しているが、緊急事態にあって恐怖が募りつつある状況で、都市内部で唯一頼ることの出来る手段と言うと、連帯の精神を呼び覚まし、自分たちが本来持っている多様な能力の再認識を促すことしかない。そもそも、この政治的ミッションは、そのより教育的な役割(言語教育から批評的な消費の勧めまで)とともに、常に(その呼び名はどうか)「民衆の家」⁷のアイデンティティの基本的な部分だったのである。そして、このミッションが持続出来るかどうかは、かなりの度合いでそれを中心的に動かす主体となる人々がどのようなヴィジョンを持ち、彼らが長期的にどれほど惜しむことなく尽力することが出来るかに掛かっている。

最後に、貧しい人々や社会的に排除された人々がいる地区では、所得が発生する機会をつくる必要がある。コミュニティハブは、その内部で行われる活動の中で雇用をつくり、起業を助け、場合によっては、それ自身が都市内の生産センター、つまり、熟練者、修行

中の者、あるいはそれを副業としてやる人たちの仕事が、地域の日常生活に役立つ具体的な何か(例えば、食品、衣服、住居の改修など)を生産するような場所になるべきだろう。

- 4 K.A. Franck; Q. Stevens (a cura di), *Loose space*, London: Routledge, 2007
D. Innerarity, *El nuevo espacio público*, Madrid: Espasa, 2006
A. Bocco (a cura di), *Qui è ora*, Macerata: Quodlibet, 2012
C. Bianchetti (a cura di), *Territori della condivisione*, Macerata: Quodlibet, 2014
- 5 R. Sennett, *The Conscience of the Eye*, London: Faber and Faber, 1990
J. Till, *Architecture Depends*, Cambridge, MA: The MIT Press, 2009
C. Ward, *Talking to Architects*, London: Freedom Press, 1996
- 6 Y. Friedman, *L'architecture de survie*, Paris: Casterman, 1978
E. Manzini, *Politiche del quotidiano*, Roma: Edizioni di Comunità, 2018
- 7 (訳注) 19世紀末よりフランス、ベルギー、ドイツ、イタリア等欧州各地で労働者階級の人々、彼らを代表する政党等の集会所として作られたもので、福祉、文化、レクリエーションなどのための機能も備えた施設であった。スミズーラのメンバーにとっては、その政治的背景や組織形態よりも、多様な活動を包含する場所と言う意味でモデルとなっている

プロフィール

[著者]

小篠隆生 (おざさ・たかお)

1958年生まれ。1983年北海道大学工学部建築工学科卒。2006年から北海道大学大学院工学研究院准教授。博士(工学)。一級建築士。専門は、キャンパス計画、都市計画、都市デザイン、建築計画。主な著作(分担執筆)には、Regenerative Sustainable Development of Universities and Cities (2013, Edward Elgar)、『いまからのキャンパスづくり』(日本建築学会、2011年)、『地域と大学の共創まちづくり』(学芸出版社、2008年)など。主な作品に、北海道大学ファカルティハウス(1995年)、遠友学舎(2001年、日本建築学会北海道建築賞)、積丹町立余別小学校(2003年、文教施設協会賞)、東川町立東川小学校+地域交流センター(2014年、北の聲アート賞奨励賞、赤レンガ建築賞奨励賞、北海道建築賞)、東川小学校・地域交流センターとその周辺環境整備(2015年、アジア都市景観賞)。主な活動として、2016年に東川町学社連携推進協議会で農林水産大臣賞を受賞(むらづくり部門)。

小松 尚 (こまつ・ひさし)

1966年生まれ。1992年名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻前期課程修了。2006年から名古屋大学大学院環境学研究科准教授。博士(工学)。一級建築士。専門は建築計画。著書(分担執筆)に Towards the Implementation of the New Urban Agenda (Springer, 2017)、『まちの居場所』(東洋書店、2010年)、『地域と大学の共創まちづくり』(学芸出版社、2008年)など。公共建築計画・運営への指導・助言として、いなべ市石榑小学校(2002年～: 公共建築賞優秀賞)、亀山市川崎小学校(2012年～)、松阪市鎌田中学校(2015年～)など。自治体の公共建築計画・設計に関する委員等も多数歴任。「キッズ・デザイン賞」(2010年)、「優れた『地域による学校支援活動』推進にかかる文部科学大臣表彰」(2012年)、「未来を強くする子育てプロジェクト 子育て支援活動 文部科学大臣賞・未来大賞」(2013年)などを受賞。

[寄稿者]

アントネッラ・アンニョリ Antonella Agnoli

1952年、伊セルヴァ・ディ・カドーレ生まれ。現在、ポーニャ在住。1977年ヴェネツィア・スピネア図書館を開館させ、2000年まで館長。2001～2008年、ペーザロのサン・ジョヴァンニ図書館長。現在は伊レッチェ市で「文化、創造性、文化的遺産の活用部」の部長 (Assessore alla Cultura, Creatività, Valorizzazione del patrimonio culturale, Comune di Lecce)として活躍中。本書でも紹介したポーニャ市立サラ・ボルサ図書館、チニゼッロ・バルサモ図書館ほか、グッピオのスペレリアーナ図書館など、数多くの図書館と協働。著書に『知の広場』(萱野有美訳、みすず書房、2011年、2017年新装版)

アンドレア・ボッコ Andrea Bocco

建築家、トリノ工科大学建築学科建築技術専攻准教授。1966年生まれ。建築家ではあるが、むしろ社会運動家、そして批評家として活躍する。大学院生だった1994年より、地域生活の再生に関わる問題に取り組み、本書でも紹介した、トリノの「地区の家」を創設し、長年ディレクターを務めた。著書に『評伝バーナード・ルドフスキー』、『石造りのよう柔軟な』(ジャンフランコ・カヴァリア共著、多木陽介訳、鹿島出版会、2015年)

[寄稿翻訳者]

多木陽介 (たき・ようすけ)

演出家、アーティスト、批評家。1962年生まれ。1988年に渡伊、ローマ在住。演劇活動や写真を中心にした展覧会を各地で催す経験を経て、現在は多様な次元の環境(自然環境、社会環境、個人の精神環境)においてエコロジーを進める人々を扱った研究を展開。芸術活動、文化的主題の展覧会のキュレーションおよびデザイン、講演、そして批評と多様な方法で、生命をすべての中心においた人間の活動の哲学を探究する。著書に『アキッレ・カスティリオーニ——自由の探求としてのデザイン』(アクシス、2007年)、『(不)可視の監獄——サミュエル・ベケットの芸術と歴史』(水声社、2016年)など。

ちく いえ やね ひろば 「地区の家」と「屋根のある広場」 はつ こうきょうけんちく イタリア発・公共建築のつくりかた

2018年12月15日 第1刷発行

著者

おざさたかお こまつひさし
小篠隆生・小松尚

発行者

坪内文生

発行所

鹿島出版会

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-5-14
電話 03-6202-5200 振替 00160-2-180883

印刷・製本

壮光舎印刷

デザイン

石田秀樹

© Takao Ozasa, Hisashi Komatsu 2018, Printed in Japan
ISBN 978-4-306-04670-2 C3052

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
本書の無断複製(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化することは、
たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

本書の内容に関するご意見・ご感想は下記までお寄せ下さい。
URL: <http://www.kajima-publishing.co.jp/>
e-mail: info@kajima-publishing.co.jp